

## 画像診断（へりカルCT）

### 動 向

近年、わが国においてCTを導入した肺癌検診が多く医療機関や検診機関で行われるようになってきた。今後も積極的な導入が推測されているが、このCT検診の導入によって肺癌検診の主目的である肺癌死亡率を減少させる効果が有るか否かは、未だ明確ではない。従来型の胸部X線による肺癌検診は、積極的に取り組んでいる地域の集団検診または個別検診で受診率は高く、市町村主導型が多く、いくつかの症例—対照研究によって、オッズ比が約0.5～0.6と算定されており、その死亡率減少への寄与効果が示唆されている。神奈川県では、藤沢、平塚市などが死亡減少が見られるようになった。しかし、それらの地域は、県下でも、ごく一部にしか過ぎず、国全体を見ると最終目標である“肺癌死亡数・率の減少”という点では、ほど遠く、有効性を示すまでは至っていないのが実状である。神奈川県予防医学協会では、より精度の高い肺癌検診によって早期肺癌の発見率を向上させ、肺癌の死亡数・率の減少を目指して、9年前より肺癌CT検診を導入している。CT検査は一般診療においては、精度が高く、より詳細な結果を目的とするので、被曝線量は2次的に考えられる向きが大きい。検診は正常者を対称とするので可能な限り低線量にしなければならない。この点、当協会は当初よりCT研究会のガイドラインに従って低線量によるCT検診を行ってきた。これまでの経過については、CT検診による発見肺癌の臨床像、cost-effectivenessについて、また、撮影マニュアルなどについても機会を捉えて報告してきた。ここで、'96, 4, 8、

の検診開始より2004, 3, 31までの9年間の結果を見る。(検診例のみについて)

### 検診結果

1. 検診受診者数は延べ11516例中、初診5242、経年6274例である。男女比2：1－3：1で、初診が減じて経年例が増えていた。
2. 発見肺癌は全例56例男性40例、女性16例であった。発見率（10万対）486, 472, 527であった。標準化発見比は、男性2.61, 女性8.47, であった。
3. CT検診発見例の組織型は、腺癌、41、扁平上皮癌 5、小細胞癌 4例AAH 6例であった。このうち、夫夫2、3、2、例が原病死した。なおこの死亡した7例はすべて単純X線（X線）で指摘できていた。また、腺癌1例と扁平上皮癌1例は検診外発見であった。一方生存例では、3例がX線で指摘できたのみであった
4. 発見例中に重複癌が8例、また、他病死2例は。腎不全と食道癌であった。
5. 年次ごとの発見率は変動があるも次第に減少を示唆している。

昨年度に絞って、受診数は初回例と経年例を分けて示すと。初回、男282、女141継経年、男756女300計1038, 441, であった。また、初回男女計423、継年発見は1056、総数1479であった。この中に、男初回例で、1例の肺癌（腺癌、1期）と前がん（AAH）1例が発見された。CT検診以来の年度ごと発見数では最もすくなかった。しかも、初回例のみに発見されていた。

関係の集計表は99頁に掲載